

4月20日 「口蹄疫を忘れない日」

池亀康雄[†]（池亀獣医科病院院長）



一昨年の本誌第63巻第10号で「宮崎県口蹄疫発生第6例目（水牛農場）に遭遇した臨床獣医師からの報告」をさせていただいた。今回は2年を経過した近況を報告したい。

口蹄疫終息直後は、8割以上の被害農家が経営を再開すると答えていた。現在、経営を再開した戸数が、60%、また家畜の導入頭数は以前の59%にとどまっている。再開しない理由は、農家の高齢化、耕種転換、飼料穀物の高騰、牛枝肉価格の下落、未だ感染経路の究明もできず、東アジアで相次ぐ口蹄疫の発生などの不安要因が挙げられる。加えてTPP参加問題もあり厳しい状況だが、何よりも時間が経つにつれ、やる気力がなくなったことである。昨年の「被害農家の心と体への影響調査」では約2割で鬱や不安障害、アルコール依存など健康への影響が報告されている。

一方、再開農家で後継者がいるところは一気に世代交代し、生産性の向上を柱に、全国のモデルとなる安心・安全な宮崎の畜産を目指している。

行政は、畜産の再開に向けて、農家への防疫指導や観察牛（おとり牛）の検診など早くから民間獣医師の活用を謳っていたが、ここでいう民間獣医師とはNOSAI獣医師のことで、我々産業動物開業獣医師には、声がかからなかった。いざ農家に家畜が導入された時、防疫上、不必要に農家に立ち寄れず、日常の診療業務で置き去りにされた感じがする。いずれにせよ我々産業動物専門獣医師は、単純に計算しても、以前の4割はならないことになる。TPP参加後の日本の畜産の姿を先取りしている印象がある。

さて、現在の診療内容は初産牛がほとんどのため、過大胎子の難産事故が目立つ。今のところ、オールアウト後の消毒の徹底もあり、飼養環境にゆとりがあるせいか、他の病気の発生は少ない。

近頃では、畜産農家でも口蹄疫の話題は出なくなった。決して忘れたのではない。悲惨な体験をした当事者

にとって、前進するには心の傷に触れたくないというのが本音である。

そのような時、宮崎県の地元紙（宮崎日日新聞）に「4月20日『口蹄疫を忘れない日』に」と題する記事があった。抜粋すると、「平成22年、本県を震撼させた口蹄疫の発生から間もなく2年を迎えようとしている。あれほどの惨劇を経験しながら、県内を見渡すと、残念ながら危機意識の劣化を感じさせる光景に出くわす。そこで、記憶の風化に歯止めをかけるため、先の口蹄疫で初の感染疑いが確認された4月20日を『口蹄疫を忘れない日』にすることを提唱する。『忘れない』ための方策として、今年は口蹄疫に関する本を題材とした読書感想文コンクールを実施。4月20日の紙面で入賞作品を紹介する。」とある。

私は一人でも多くの方々に問題意識をもっていただきたいという思いから、かねてからの所感の一端を綴り応募した。

国の疫学調査チームは初発水牛農場と断定しているが、感染経路不明のまま調査を終了した。しかし、私にはこの結末を容認すると、後世でまた惨事が繰り返されるという、強い危惧の念がある。

正しい情報の開示なしに、県民、県と国の一体化はあり得ず、口蹄疫侵入経路の徹底究明が頓挫した最大の理由でもあろう。

地元紙に掲載された私の感想文を読んだ、川南町JA内にあるクリーニング店のおばさんが「水牛が口蹄疫を日本へ持ち込んだと、今まで思っていました。みんながそういっていたし、その後の報道も規制されていたみたいだし、水牛ではなかったのですねえ。」と話しかけてきた。

全国の会員の中には、まだ水牛が口蹄疫の感染源と考えている方もいると思われる。皆様の支援に応えるためにも、今後とも、口蹄疫侵入経路の究明に取り組んでくつもりである。

なお、正しい情報の開示を求める機運が高まることを切望して、以下に4月20日 宮崎日日新聞に載った拙文を紹介させていただく。

[†] 連絡責任者：池亀康雄（池亀獣医科病院）

〒884-0005 児湯郡高鍋町大字持田5648-10

☎・FAX 0983-23-3987

E-mail : ikigame.yasuo@cocoa.plala.or.jp

南 邦和・小詩集 記録詩(長詩)「口蹄疫」を読んで

宮崎日日新聞文化欄の「口蹄疫経過 長詩に記録」という見出しにひかれ早速取り寄せた。詩の形式だから文にリズムがあって引き込まれる。口蹄疫の発生から終息までの間に起きた事象や新聞に投書された人々の思い、また用語の解説なども盛り込まれて〈あの時〉が臨場感を伴って鮮やかに蘇る。自分の生活の場が、町が、県が、国が口蹄疫の大きな渦に呑み込まれ混乱した。当時の悲惨な状況がひしひしと迫ってくる。経時的に淡々と語られる叙事詩ならではの説得力がある。

詩の冒頭で「都農町で一頭の水牛に症状がでた／ふるさとに水牛がいたことを知ったのは／この時からだが…東南アジアから持ち込まれた水牛たちが／この口蹄疫の源泉になろうとは…」と詠んでいる。私は水牛を診療していた獣医師として、この一節にはひどく打ちのめされた。日本では水牛に対する誤解と偏見がある。“水牛”というとアジア／アフリカの発展途上国のイメージが優先しているが、イタリアでは水牛酪農は確たる地位を築いている。20世紀後半にはアメリカ合衆国、ブラジル、オーストラリアなどの畜産先進国でも水牛の乳肉生産が行われるようになった。

また、「一日遅ければ 一億円の被害…」とも詠まれている通り、国は口蹄疫侵入経路の徹底究明よりも、一刻でも早い清浄国復帰が国益であり国是であると判断した。これらの要因が重なって“初発水牛ありき”のシナリオがつくられ、メディアに発信

された。その情報を鵜呑みにして疑わない世間一般。非常事態の中でこそ、氾濫する情報の真偽を冷静に見極めたい。

日本人は総じて水牛に関し無知であった。都農町に導入された水牛は口蹄疫清浄国であるオーストラリアから直輸入したものだ。検疫時の抗体検査も陰性と報告されている。断じて“源泉”ではない。真実が伝わらず、パッシングの嵐に気丈に耐えていた若い水牛農場主を思うと、胸が締め付けられる。この詩中の言葉を借りて言うならば“水牛は死んでも死にきれない”。

さて、国益とは何であろうか。私は嘘、偽りのない正しい情報の開示と徹底した検証が大前提であり、それを基に皆が協力し、地域に即した防疫体制を構築することが一番重要であり、真の国益であると考えます。

詩はさらに「『口蹄疫』は まさしく〈戦争〉なのだ／細菌と人間の 人間と人間の 地域と地域の／今こそ 政治の力と良識が発揮されるとき」と語りかける。後世に禍根を残さないためにも私たち一人一人が良識を発揮して、真の“源泉”を究明する時ではないだろうか。あの4カ月の間に、私たちは実にさまざまな体験をした。この詩を読んで改めて思った。

口蹄疫ウイルスの猛威、東日本大震災、巨大津波、放射能汚染など次々と起こる災害に、私たち人間は、今こそ生き方を問われている。

宮崎日日新聞 提供